# 「鷹爪花」は青く花咲く

## ――佐藤春夫の台湾滞在に関する新事実――

河野龍也

あうそうくわ　*Artabotrys odoratissimus R. Br.*　木蘭科
庭園ニ栽培セラル、蔓性常緑灌木ニシテ多ク棚造トシテ育成セラル、葉ハ互生楕円形ニシテ全縁、花ハ淡緑色ヲ呈シ香気アリ、果実ハ内質ニシテ稍々球形、成熟スレバ淡緑色ヲ呈ス。【方言及漢名、外国名】鷹爪花（漢）イランイランテイナ（比、西）[1]
含笑（ハムシヤウ）、夜合（ヤアハプ）、鷹爪（イエンツヤウ）共に其花香気高し、之れ亦婦人花簪に用ふ[2]

### 一　南部生活の謎

一九二〇（大正九）年七月六日に台湾に到着した佐藤春夫は、同月下旬、約二週間対岸の福建地方に渡ったほかは、九月中旬まで、ほぼ二か月を打狗（タカオ）の友人・東熙市（ひがしきいち）の家で過ごし、周辺の都市を見学している。一〇月一五日までの滞在期間のうち、約三分の二を南部で過ごしたことになるが、そこでの暮らしぶりや行動については、実はよく分からない部分が多い。

九月一六日に打狗を出発し、一〇月一日に台北に到着する縦断旅行の体験は、「旅びと」（『新潮』一九二四・六）「霧社」（『改造』一九二五・三）「殖民地の旅」（『中央公論』一九三二・九～一〇）の諸作品に克明な記述がある。その一方、南部を舞台とする作品にも、「女誡扇綺譚」（『女性』一九二五・五）と「鷹爪花」（『中央公論』一九二三・八）とがある。しかし、前者は小説としての完成度が高く、台南

での見聞は巧みに虚構へと溶かし込まれている。後者は打狗東方の都市・鳳山を訪ねた日の記憶を描いているが、ごく短いスケッチである。ほかにも、H（東）の家での生活に触れた「かの一夏の記」（『霧社』一九三六・七、昭森社）や、東歯科の技工助手であった鄭（享綬）の思い出を語る「羈旅つれづれ草」（『世界の旅・日本の旅』一九五九・一〇）もあるが、生活の断片をわずかに窺うに足る程度である。春夫の台湾滞在には、文字にされなかった空白部分が意外にも大きい。

春夫の滞在から約二〇年後、ある青年教師がそれを熱心に埋めようと試みた。台南第二高等女学校に在職中の新垣（にいがき）宏一である。彼はまず、「女誡扇綺譚」の漢詩人「世外民」が〈台南から汽車で一時間行程の亀山の麓の豪家の出であつた〉と紹介されているのに着目する。その記述が「かの一夏の記」にある〈旧城の陳などは今でもよく覚えてゐる〉と共通することに気づいた。旧城は高雄（旧打狗）から汽車で一駅、亀山の麓に広がる町で、高雄生まれの新垣には馴染みが深い。また、「鷹爪花」に登場する〈陳〉という名の〈小柄なきやしやな美男子〉も、この〈旧城の陳〉と同一人物であろうと推測した。

新垣が最初に訪ねたのは高野（こうの）福次という歯科医である。高野は東京歯科医学専門学校を出た東熙市の後輩で、東のもとで働いたあと医院を引き継ぎ、のちに移転したが、[3] 高雄では古参の歯科医として市内で診療を続けていた。

> 高野歯科医師の談を聞くと、陳といふ旧城の金持が東氏の家へよく遊びに来たことはたしかで、何でも東氏はこの陳から金を借て家の設備をしたやうだと言はれた。とにかくこの陳は東氏、春夫等と同じ位の年輩で、性質も面白かつたといはれる。よく三人で飲み廻つたりするくらゐ気があつたらしい。[4]

高野から教えられた名前は不正確だったが、その後詳細が分かり、新垣は一九四〇年の初め頃、その人物に高雄市内のレストラン山水亭で会っている。元岡山郡左営庄長、今は高雄市塩埕町で薬種業を営む陳聰楷である。陳は確かに東熙市と交友があったと語り、東の家に滞在中の佐藤春夫を、台南、鳳山、旧城などへ伴ったという。台南見物は最初、台南庁職員が案内し、後に陳が別の友人と一緒に安平（赤嵌城址）や赤嵌楼（上記と別に市内にある遺構）へと案内した。その折は、禿頭港（仏頭港）や台南米街（現在の新美街の一部）といった「女誡扇綺譚」の舞台を散策し、春夫は旅館四春園に泊まったという。散策中に見つけた廃屋に惹かれて、春夫が帰宿後一人で写生にでかけたこ

とや、本島人（当時台湾漢族を指した）の青楼（遊廓）を見に行ったとき、暑さに閉口して電扇（扇風機）を探したことなど、同行者でなければ分からない様々な細部を陳は記憶していた。そのとき春夫は夜の台南を、厦門で買ってきた白い中国服で歩いたという。[5]これらは台湾滞在中の春夫に関する数少ない証言の中でも、最も豊富な内容を後世に伝えているものである。

高雄における春夫の暮らしぶりを知ろうとして始まった新垣の調査は、高雄生まれならではの土地勘や人脈に助けられて確実な成果をあげた。一緒に安平を見に行った陳聰楷から「世外民」のイメージが作られたことは、新垣の調査によって初めて明らかにされたものである。ただし、公学校を卒業してすぐに精米関係の実業に就いた陳には、漢詩人としてのプロフィールは求めにくい。この点に関しては、「殖民地の旅」に出てくる鹿港の許媽癸が「もう一人の世外民」ということになる。

新垣の調査は「女誡扇綺譚」の舞台裏を解明することに主眼を置くものであった。そのためか、陳聰楷自身が登場する「鷹爪花」についての情報は少なく、作中の尼寺が〈鳳山竹仔脚の明禪堂（ママ）のことであらう〉と明かされているのみである。本稿では、この極めて簡略な言及を振り出しにして、「鷹爪花」成立の背景を紐解いていくことにしよう。

## 二　「鷹爪花」の構成

「鷹爪花」は、台湾南部の古い都市、鳳山を訪ねたある日のスケッチである。季節は八月の末。〈二十六七の青年〉という陳の案内だった。鳳山で同姓の陳が営む米屋を訪ね、暑苦しい二階でビールを三杯飲まされる。そこへ現れたのは一人の憲兵であった。同行の陳に促されて米屋を出ると、二人は人力車を連ねて橋を渡り、竹林のなかにある尼寺に入った。婆さんにすすめられた熱い茶を飲んでいるとき、陳に注意されて見ると、扉の蔭から様子を窺っていた女が水色の裳を翻して立ち去るところだった。鳳山の陳兄弟の妹だという。商売のやり方に問題のある二人の兄弟とは対照的に、妹はおとなしく、男が嫌いでここへ来て、尼の見習いを始めたという。小柄なきゃしゃな美青年の陳がそう語るのを聞いて、「僕」は彼がその妹を好いているのではないかと空想した。急な雷雨がたちまち晴れ、庭に出ると鮮やかな紅い花と露に濡れた竹の葉が美しい。陳が摘んでくれた小さな青い鷹爪花の香を嗅いでいると、真蒼な空一杯に虹が浮かんでいた。

内容としてはこれだけの小品である。とは言え、短いながらにしっかりした構成を持つ作品である。前半は米屋の二階で汗をかきながらビールをのむ暑苦しい場面。後半は

鳳山明善寺（旧明善堂）2012.8.29

一転して、別世界のように涼しい尼寺の場面へと転換する明快なコントラストがある。また、〈風は死んでゐた〉という米屋の二階からおりて俥を走らせると、〈遠雷がして来て、今まで死んでゐた風がどうやら少し動き出したらしい〉。やがて〈竹の葉を動して風が来る〉なかを尼寺に着いて休む頃には、〈暑いのをちよつと忘れてゐた〉。そこへ怖ろしいような雷雨が来たあとに美しい虹がかかるという一連の展開は、風と雷で緊密な伏線を仕組み、それによって時間の経過や空間の広がりを巧みに演出している。移ろいやすい南部台湾の気候の特徴がよく活写され、一読するだけで熱帯の雨上がりの涼感を堪能できる。

前後半をまたぐ展開上で見逃せないのは、さりげなく橋を渡る場面が挿入されていることだろう。川を渡った先にある尼寺は、ちょうど夢幻の中のような別天地の印象に包まれる。陳聰楷の証言によれば、この尼寺は竹仔脚の明善堂ということだった。市街から東部郊外の竹仔脚に向かうには、鳳山龍山寺という古刹の門前を通り抜けて鳳山橋を渡るのが当時のルートだった。〈尼寺への道には川があつて橋があつた。我々の俥の渡つたのは新らしい橋だつたが、その少し遠くに旧い橋がある。何でも古くからある有名なものださうだ〉。その旧い橋とは、鳳山県城東便門の外にあり、阿緱（屏東）に向かう要路にあたっていた東福橋（一八四一年築）である。二つの橋からほど近い明善堂は、今は尼寺ではなく、名前も明善寺に改めた。閑寂な周囲の

竹林は切り拓かれ、寺の建物も近代化している。しかし、東門渓（現鳳山渓）にのぞむ明るく涼しげな立地は往時のまま変わらない。

「鷹爪花」に描かれた尼寺は、陳聰楷の証言と地理的に符合し、鳳山訪問の実体験の片鱗が伝えられている。しかし、作品化においては文学的効果が重視されるとともに、現存するモデルへの配慮から、事実をしばしば虚構化するのが作家の常である。それは恐らく、小説を事実の反映として解釈する「私小説」的な読書習慣が大正期に一般化したことと無縁ではない。「鷹爪花」の設定にも、調べてみると事実が大きく改変された部分がある。

もとよりモデルを顧慮しての改変ではある。が、目的はそれだけではない。設定を現実と変えることは、虚構としての自由度を確保することにもつながるからである。「鷹爪花」の虚実を探ることは、単にモデル探しという意味での現実指向にとどまらない。文学とはどのような形式で現実から離脱するのかが、そこから明らかになる。

## 三　陳聰楷と鳳山

そもそも鳳山に陳という〈米屋〉は実在したのだろうか。実在したのなら商工組合に加入しているはずである。この町には、一九一八年一月に認可された鳳山共進信用組合があり、前年一一月に提出された設立申請書には、当時鳳山

2001 年の台風で流失した東福橋の橋脚　2017.1.31

で営業していた事業者の名が網羅されている。登録事業者（出資者）は二八九名。このうち〈米屋〉の該当者は、精米業者が一二名（王・劉・林・邱・孫・陳・蔡各姓）、米穀業者が六名（朱・蔡・林・張各姓）、米粉業者が二名（蕭・鄭各姓）の計二〇名である。陳姓の精米業者が一名だけ存在する。それが春夫の案内人の陳聰楷本人なのである。[6]

陳聰楷は左営の地主・陳乃獲の長男。一八九二年九月九日生まれで春夫とは同年である。略歴によれば、一九〇七年旧城公学校を卒業後、打狗新浜町の瑞和商行（米糖商・支配人周鏡輝）会計員に就職。また王兆麒と鳳山で製米（精米）、製飴、材木業の店を共同経営するが、第一次世界大戦後の不況で左営庄（旧城）に帰郷。その後、一九二〇年一〇月の地方自治制度導入時に左営庄協議会員（満二八歳）となり、一九二二年四月には庄助役。さらに同六月には庄長に昇任。一九三七年一一月まで在任期間は一五年の長きに及んだ。年少の庄長を見て最初庄民は案じたが、穏やかな人柄と時世への機敏さ、また公益事業への熱意により逸材と認められた。公職引退後は高雄市内で薬種業に従事。一九四九年五月二〇日に歿している。[7]

一九二〇年八月下旬頃は、経歴上から見ると陳が地元の左営にいた時期にあたり、春夫が彼を〈旧城の陳〉と呼んでいるのに符合する。だが、その少し前までは彼自身が鳳山にいた。一九一八年一〇月に発行された『台湾商工便覧』第一版には、これに関連する広告が出ている。〈米穀精米業・水飴製造販売・材木販売　東洋生命保険会社代理店　振兆豊商店　王兆麒・陳聰楷　鳳山街土名県口三二九　電話四二番〉。[8] この「振兆豊商店」の住所は、信用組合の設立申請書に記載された陳聰楷の住所と、組合筆頭常務の精米業者・王兆麒の住所とに一致している。陳聰楷にとって、鳳山に気の置けない〈米屋〉があるとすれば、それは彼自身の古巣であった王兆麒の精米工場を第一と考えるべきだろう。つまり、「鷹爪花」に登場する〈鳳山の陳〉は、王兆麒だったのではないか。

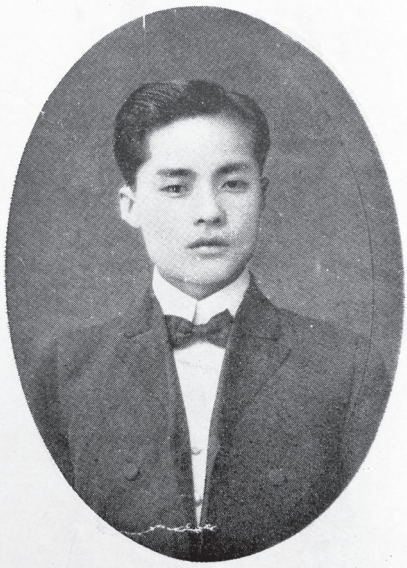
この想定は別の角度からも裏付けられる。王兆麒の妹は、名を王氏嫌、淑寛と号し、明善堂の尼僧となっているのである。一八九八年二月一九日に生まれた彼女は、一九二五年七月、前堂主・洪三娘が逝去した後をうけて堂主を継承し、一九六三年に歿するまでここに持斎の生活を続けた。漢学に秀でた聡明な女性で、高雄州の三才女と謳われたこともある。[9] 現在の明善寺に掲げられている「鳳山　明善堂沿革」によれば、淑寛の堂主就任は一九一三年とあるが、当人はようやく一五歳（満年齢）を迎える年だから、これはあくまで補佐的な役割と見るべきだろう。春夫たちが訪ねた一九二〇年当時、彼女はすでに二二歳になっていたが、

前堂主も健在だった。〈まだ本当の尼さんではありません〉という作中の陳の言葉は、これを指すものと見てよいかも知れない。[10]

「沿革」によれば、明善堂ではちょうど一九二〇年に、「前殿」と「後進」（仏堂と生活空間）を増築して規模を拡張したことが見えている。[11] 陳が〈この尼寺へ喜捨したりした事がある〉という「鷹爪花」の記述は、この普請の際のものだろう。王兆麒の家と深いゆかりがある明善堂に、共同事業者の陳聰楷が喜捨するのはごく自然である。〈男は入れない〉という尼寺を訪ね、〈自分のうちのやうに気安げに〉くつろぐことができたのは、彼自身が鳳山に住み、王家と密接な関係を築いていたからなのである。[12]

## 四　王氏の精米業

「鳳山の陳さん」を「王さん」に読みかえ、「鷹爪花」前半の米屋を「振兆豊」とするならば、その舞台は当時の台南庁鳳山街土名県口三二九の王兆麒方、すなわち現在の高雄市鳳山區三民路二九五巷一號・三號および二八七巷二號之一に相当することになる。県口の地名の由来は清代の県署の前という意味で、文字通りこの附近は鳳山の中心街だった。大通り（光遠路）の影に隠れたカーブした路地（三民路二九五巷）がかつての水路（玉帯溝）で、「振兆豊」はこれに面して店を構えていた。今はもう当時の建物は見られない。



王兆麒
『人文薈萃』1921.7 遠藤写真館

王家が精米業を始めたのは、製糖業と関係が深い。王兆麒の父・王希璧（一八六六～一九〇九）は、最初官庁の建築請負業に携わり、後に度量衡販売、製糖業へと転じている。総督府の製糖奨励策によって無償貸与されたサトウキビ畑で原料を調達し、石油発動機を使った新式製糖で成功したのが父であった。[13] 次男の王兆麒（一八八九年一二月二九日生）は、漢学私塾に学んだあと、一九〇三年二月（満一三歳）から父の度量衡販売を手伝っているが、翌年五月

には牛寮庄にあった父の経営する壁記製糖工場に入り、六月に台湾糖務局で機関学を修得している。これは新式製糖工場の発動機操作を担うために必要だったのだろう。

壁記では砂糖生産に使う発動機を、副業として精米にも応用していた。これを兆麟（一八八七年生）・兆麒（一八八九年生）・兆燕（一八九一年生）の三人の息子が継承し、一九〇九年四月、阿緱（現屏東）の帰来庄に兄弟商会精米所を開設して発展させたのである。[14]

この間、早世した三兄弟の母李氏の後に、一九〇六年、希壁は徐氏を後妻として迎えている。徐氏との間には嫌（淑寛・一八九八年生）と兆熊（一八九九年生）が生まれていたため、淑寛は王兆麒にとって腹違いの妹ということになる。[15]王猛氏（兆麒孫）によれば、以前、この地方では家に凶事がある時は子を仏に預けるという習慣があり、ある僧侶の算命（占い）に従って、淑寛は九歳で明善堂に託されたのだという。[16]淑寛の生年から見ると、数え年九歳の時期はちょうど母が王家に入戸した年に当たる。彼女の出家は家族関係の変化によるものとの推測も成り立つ。

父亡きあと、王家は製糖業から撤退し、精米業を中心に生計を立てていった。王兆麒はほかにも阿片膏薬請負販売（一九一二年九月。当時は総督府の鑑札制度の下で販売・使用が公認されていた）、水飴製造（同一二月）、材木販売（一九一六年二月）など様々な業種へと経営を展開させる一方、鳳山支庁第一保保正（一九一一年）、同第十五保保正（一九一四年）などの公職にも就いて地方公益を図り、鳳山を代表する実業家として活躍することになる。[17]

王兆麒の以上の経歴は、やはり多くの点で「鷹爪花」に符合する。例えば〈米屋の二階の夏と言へば、それだけでも、もう暑さはたつぷりの気がするだらう〉という一節。米屋と言っても米穀販売ではなく、石油発動機を使った機械精米であれば、これは実によく理解することができる。もし工場が稼働中だったならば、建物の二階は熱気と排気に加え、騒音と振動でよほど暑苦しい状態だったろうと想像がつく。

もう一点は、店に憲兵が訪ねてきて、陳と「僕」が中座するように店を出る場面である。〈鳳山の陳さん兄弟、男二人あります。兄さん阿片密輸入して今調べられてゐます。弟の陳さん、米のことで詐欺になる。それで憲兵さん、そのことで来たのでせう〉。尼寺に着いたあとで陳はそう「僕」に教えている。実際、阿片膏薬請負販売の公認業者であった王兆麒の店でも、類似する出来事が過去になかったわけではない。ところが、細かい部分になると事実は作品と異なっている。まず、密輸入を企てたのは使用人であり、店主はその不始末を問われた形であった。しかも、この事件

は二年以上前に解決しているため、そのことで憲兵が来たとは考えにくいのである。[18] むろん米の詐欺があったという事実も伝わってはいない。春夫の訪問中に本当に憲兵がやって来なかったと断言する材料はないが、多分に演出である可能性が高いのではないか。「鷹爪花」は事実の概略を借りながら、春夫が意図してこしらえた虚構も少なからず含まれているようなのだ。

## 五　作られた「事件」

端的に言えば、作品は書かれるべき「事件」を必要とする。実際、憲兵の訪問という「事件」があることで、この作品は俄然、活き活きと動き出すのである。それはまず、米屋を中座して次の行動に移る理由づけになる。そしてまた、なぜ憲兵が来たのかというサスペンスが、読者の関心を作品に吸引する。前半に置かれた不吉な緊張感が、後半に緩解されていくという流れが生まれ、場面転換はよりドラマチックになる。

「事件」があることの利点はそれだけではない。それは尼寺に着いてから陳が、〈兄さんたちよくない人でも、妹さん、おとなしい〉と述べる部分にあらわれている。〈男を嫌ひ〉で顔さえ見せてくれなかった「妹」。〈白い顔は印象をとらへるひまもなく、ただ水色の裳だけが眼底に揺れて残つた〉とある一場の夢のような彼女は、〈兄さんたち〉が〈よくない人〉であることによって、かえって気高く清らかな存在としての印象を強くするのである。

「暑い米屋／涼しい尼寺」「無風状態／動き出す風」「紅い大きな花／青い小さな花」「よくない兄さん／おとなしい妹」。効果的な「虚構」は分かりやすいコントラストの形式を必要とするらしい。あえて〈兄さんたち〉に悪役を買ってもらい、彼らとの虚構上の対比によって、見たこともない彼女はこよなく清らかな人へと昇華された。そして結末の「僕」は、台湾の女性たちが好んで花簪に用いた鷹爪花の甘い芳香を嗅ぎながら、立ち去った佳人の残り香を惜しむように、雨上がりの花園に立ち尽くすのである。

〈あの人、男を嫌ひ。それで尼さんになると言つてここへ来ました〉と陳が語る作中の「妹」は、現実には九歳のときに、家族の意向で尼寺に預けられた女性であった。〈男二人〉とされる彼女の男兄弟は、実際には三人の兄と一人の弟であった。作中にドラマをもたらした「事件」は、二年以上前に解決していて今さら憲兵が調べに来るとは思えない。また、彼女の兄たちは、〈よくない人〉どころか、地方公益に尽くす名士だった。[19]

これらの虚構が、作品を文学的に結晶させるための効果

的な手段であったことは、これまで述べてきた通りである。もちろん、そのような文学的な要請において改変されたり誇張されたりして創作された内容が、世話になった現実の人々に迷惑をかけるのは避けなくてはならない。だから春夫は、現実の「王さん」を「陳さん」に変えた。それはむろん、モデルに配慮するためであったことは間違いない。だが、ここで特に注意したいのは、書かれた内容が「事実だから」春夫は名を変えたのではなく、逆に「事実ではないから」名を変える必要があったということなのである。いずれも人物の名を粉飾することに変わりはないが、動機においては逆の発想である。

紀行に関する作品と言えば、読者は得てしてノン・フィクションであることを前提に読んでしまいがちである。だが、文章が常に「構成」されるものだという原理を考えれば、そもそも厳密なノン・フィクション自体があり得ない。実際の見聞をどの程度作品に活かすのか、その度合いに違いはあるにしても、文章は基本的に現実の出来事から自由に離れることができる。むしろ、その自由度こそが文学だと考えたのが春夫であろう。

実体験を再構成してできあがった虚構は、現実とは別物である。しかしそれを現実だと読みたがる読者がいるために、モデルの粉飾が必要になる。その粉飾は事実を隠すためではなく、虚構を事実から解放するために行われるのである。

「鷹爪花」についての事実考証は、虚構や現実と向き合う春夫の文学者としての姿勢を垣間見せてくれたようだ。若き日の春夫が森鷗外のある一言に感動し、〈発表当時から今日の現在まで〉その一句に〈啓発されてゐる〉と晩年に及んで語っていた事情を、[20]ここで思い出すべきかも知れない。その言葉とは、「追儺」（『東亜之光』一九〇九・五）の中にある次の有名な一句である。

小説といふものは何をどんな風に書いても好いものだ

（森鷗外）

**付記**　本稿をなすにあたり、陳聰楷・王兆麒ご子孫に多くのご教示をたまわりました。二〇一七年五月に逝去された王猛氏が、病床から日本語で丁寧に質問に答えてくださったことが忘れられません。王智生氏、陳錦清氏（二〇二〇年一〇月一七日逝去）、また蔡維鋼氏にも大変お世話になりました。みなさまのご協力に謹んで感謝申し上げます。なお本稿は、ＪＳＰＳ科研費１８Ｋ００２８９の助成を受けた成果の一部です。

## 注

(1) 台湾総督府殖産局編『台湾薬用植物調査報告書』（一九一九・三、台湾総督府殖産局林業試験場、三頁）。

(2) 片岡巌『台湾風俗誌』（一九二一・二、台湾日日新報社、一一四七頁）。

(3) 東歯科医院の所在地は台南庁大竹里打狗山手町一二七番地。改正後の高雄市寿町五番地。台湾地所建物株式会社からの借地に建てられていたが、一九二一年に東が台南の分院に転居し、翌年改めて台南で開業したため高野歯科医院になった。しかし、一九三六年の資料では、所在地が湊町一丁目になっている（鳥居兼文『台湾総職員録昭和十一年版』一九三六・一二、台湾総職員録発行所、九九五頁）。一九二八年、右隣にあった旧山一商行出張所（器械・建築材料販売）の洋風建物に開業した寿旅館は、地図や写真で見ると段階的に規模を拡大している。新垣宏一が東医院の跡地を〈現在寿旅館のあるところ〉（「台湾文学艸録（十七）」『台湾日報』一九三八・一一、四面）と紹介していることも考えると、高野は寿旅館に土地を譲って転居したのだろう。

(4) 新垣宏一「台湾文学艸録（十九）」（『台湾日報』一九三八・一一・五、四面）。

(5) 新垣宏一「「女誡扇綺譚」と台南の町（三）」（『台湾日報』一九四〇・五・一、四面）。春夫の厦門旅行は、一九二〇年七月二一日に打狗を出て、八月五日に基隆に戻る日程だった。陳の証言は、春夫の台南見物の時期が八月以降であったことを示す。

(6)「有限責任鳳山共進信用組合申請定款變更認可ノ件」（1919-05-01）、〈大正八年臺灣總督府公文類纂永久保存追加第七卷地方〉、《臺灣總督府檔案 總督府公文類纂》、國史館臺灣文獻館、典藏號：0000299011。

(7) 柯萬榮編『高雄州地勢人物誌』（一九三四・二二、臺南民衆揚瀛社、一一八頁）、林亮編『御大典記念高雄州人士録』（一九二九・七、台湾パック屏東支局）「「左営庄長任命さる」（『台湾日日新報』一九三七・一一・二九、五面）の各記事、および陳錦清氏からの聞き取り調査に基づく。陳聰楷の庄長職「勇退」は、時期的に見て日中戦争開始にともなう皇民化運動に関連すると見られ、後任には内地人庄長として益田清照が就任している。

(8) 鈴木常良『台湾商工便覧』（一九一八・一〇、台湾新聞社、広告頁）。

(9)「堂主承繼」（『台湾日日新報』一九二五・八・一五、四面）および「高雄特訊／春秋月旦」（『台湾日日新報』一九二四・八・一一、四面）。

(10)「糖業規則ニ依ル許可地相續ノ件（相續人王兆麟外）」

(1918-01-01)、〈大正七年臺灣總督府公文類纂十五年保存第六十六卷殖產〉、《臺灣總督府檔案 總督府公文類纂》、國史館臺灣文獻館、典藏號：00006572003、および現在の寺内に掲げられた王進瑞（兆麒次男）撰「鳳山　明善堂沿革」（一九七一・一一）による。

(11) 王智生氏（兆麒孫・一九三九年生）の幼時の記憶によれば、明善堂の両側は竹林で、道から敷地に入ると手前の棟の左が堂守（淑寛）と養女（素霞）の部屋、右には二人の女性信徒が住んでいた。渡殿を伝って奥に仏堂があり、左右が客間。川を背にして周囲には龍眼・連霧・釈迦頭などの果樹が多く植えられていた。淑寛は背が高く、厳しい表情に見え、剃髪はしていなかった。読書を好み、漢詩の作り方を教えてくれたという。仏道に励む質素な生活を理想とし、小さな斎堂で満足していたという（二〇一八年三月一八日採録）。

(12) 王兆麒は一九一一年四月、鳳山街県口に藍麟と瑞穀精米工場を設立している（注6参照）。陳聰楷の妻は藍の娘・淑端である。また、王家の嬉媒嫺が陳家に寄留した例もあり、これらのことから両者の家ぐるみの関係を窺うことができる。

(13) 「王希璧度量衡器販賣特許及位置變更認可」（1901-04-01）、〈明治三十五年臺灣總督府公文類纂十五年保存第二十卷殖產〉、《臺灣總督府檔案 總督府公文類纂》、國史館臺灣文獻館、典藏號：00004690015、「糖業奬勵規則ニ依ル無償貸付業主權附與」（1920-01-01）、〈大正九年臺灣總督府公文類纂十五年保存第十八卷地方〉、《臺灣總督府檔案 總督府公文類纂》、國史館臺灣文獻館、典藏號：00006821007、および「王希璧製糖場の開業」（『台湾日日新報』一九〇五・一二・一三、四面）、「新式糖廊之完善」（『漢文台湾日日新報』一九〇五・一二・二七、四面）の各記事による。

(14) 注6参照。

(15) 注10参照。王智生氏によれば、祖父兆麒はその後、台北の大稲埕に開業したこともあるが失敗。一時期は台南の五福百貨店に勤め、宮古座（台南）の隣に店を持ったが、先物取引で損失を出し、不如意のまま四〇歳を迎える前に亡くなったという。一九二九年七月発行の『御大典記念高雄州人士録』（注7参照）には、すでに〈故王兆麒氏〉と出てくる。

(16) 幼時、明善堂に住んだ王猛氏は、淑寛から『三字教』を台湾語で教わった記憶がある。一字覚えるごとに涙を流して喜ぶ鍾愛ぶりで、猛氏も姑婆（コーポー）と呼んで懐いた。殺生に関しては厳しく、川で魚を獲りひどく叱られたことを覚えている（二〇一七年三月一七日採録）。

(17) 注6参照。
(18)「阿片密輸出発覚」(『台湾日日新報』一九一八・五・一一、四面)および「阿片令違反処罰」(『台湾日日新報』一九一八・六・九、四面)。
(19) 王希璧の長男で王兆麒の兄、王兆麟(一八八七〜一九六三)もまた鳳山の名士として知られ、糖業経営を学んだのち一九二〇年に仏教に帰依し、一九二六年に台南の弥陀寺住職になった宗教家である。
(20) 佐藤春夫「鷗外は果して旧いか」(『現代日本文学全集』月報三、一九五三・一一、筑摩書房)。

**哀悼**　お世話になった近藤みゆき先生に、南国の小さな青い花の名を持つ物語についての小論を捧げます。佐藤春夫の台湾紀行から百年。百年前の場所や物や人のつながりといった、うつろいゆくものの現在の姿を探っていると、逆にこれから百年が経ったとき、残り続ける今の痕跡とは一体何だろうと考えずにはいられません。先生のお人柄とお仕事を偲び、心からお悔やみ申し上げます。

(こうの　たつや・実践女子大学教授)